

(2) 雪国集落としての特徴

1. もうひとつの雪国景観～白川郷と比較して～

雪国景観として全国的に知られている集落に、岐阜県白川村の荻町合掌集落を中心とするいわゆる「白川郷」がある。

白川郷には、大規模な合掌造の民家が屋敷林を従えて点在している。豪雪地であり、雪を滑り落とす急勾配の茅葺屋根がならび、印象的な景観を形成している。一般の人が「雪国」として思い浮かべる風景は白川郷のそれに大きな影響を受けているものと思われる。

白川と比較して、石徹白地区は、同じ雪国でありながら対照的な景観となっている。石徹白地区的民家は緩い勾配の板葺き屋根（現在はトタン葺き）であり、雪を滑り落とすのではなく、屋根の上に人が乗って「雪かき」をしやすい構造となっている。

このように、石徹白地区的集落景観は、白川とは異なる手立てで雪に対処した「もう一つの雪国景観」である。

そして両者の比較により、いっそうその特色が明らかになるものである。

2. 個性的な民家と消雪池の景観

石徹白地区的民家の多くは、落とし板（落とし込み板）工法でつくられている。また、現在はトタン等に葺き替えられているが、一昔前までは、「クレ板石置き」屋根が多くあった。こうした板材の多用は、豪雪地帯であり、また良質な木材（特にスギ材）に恵まれていた石徹白地区ならではの特色と見ることができる。

一方、敷地の特色としては、消雪池が挙げられる。雪国ならではの景観である。各戸が水路沿いに立地し、水路を庭に引き込んで池をつくり、冬期はこの池に雪を落とし込んで溶かす。

池を結ぶ水路は、冬期のこうした使われ方を反映して「湯（ゆ）」と呼ばれる。これらの消雪池は、雪を溶かす機能だけを持つものではなく、池の形状を工夫したり、周辺に植栽を施すなど庭園としての整備を行う例が見られる。夏期は水面を見せる事で涼しげな風景を生み出すなど、地区の憩いの空間ともなっている。

その他、門扉をつくらない構成も、雪の処理のしやすさを考慮したものと思われる。

こうした民家や敷地の構成は、石徹白地区的気候風土を印象づける重要な要素である。

3. 冬期の降雪時の景観

石徹白地区は、冬季はかなりの降雪量となり、最盛期には各戸の1階部分がほぼ雪に埋まり、2階と屋根のみが雪の上に顔をのぞかせる。

豪雪地帯においては当然のことながら、冬季は、夏季の緑豊かな風景から大きく姿を変える。

冬季には、民家をはじめとして石積みや水路など、夏季の石徹白地区を特徴づける景観的要素はほとんどが雪に埋もれてしまう。しかし、山に囲まれた緩やかな斜面という立地は、集落全体が雪の湖に沈みこんだような特徴的な景観を生み出す。

また、石徹白地区では、雪に対する備えとして各戸ごとに雪囲いを立てる。中居神社や威徳寺では昔からの方が続けられており、板材を用い、集落の人々が協同で雪囲いを行う。こうした雪囲いは、降雪前や雪解けの時期のみに見ることができるもので、石徹白地区的季節の移り変わりを感じさせる景観要素である。



白川郷・荻町合掌集落を城山展望台から眺める



合掌造り（白川村）



石徹白地区的雪おろしの風景(右)
と「湯」(下)

屋根から下ろされた雪は、冬季でも凍ることなく水が流れる水路に流される。



石徹白地区中所集落を眺める（山に抱かれた風景）

